

「和久里融通大念佛狂言」の世界

——祈りの形象かたち——

村上 美登志

I、始めに

前稿^①では、「和久里融通大念佛狂言」の成り立ち、壬生狂言を絡めたその価値等について論じ、これまで不明とされてきた箇所については、その解明を試みた。したがって、本稿では、「和久里融通大念佛狂言」の内実の具体について、報告しておきたい。

II、「狂言番組」の具体

「和久里融通大念佛狂言」は、六年毎の子と午の年に奉納される^②。演目内容は、左記の通りである（奉納年によっては、時間等の変更もある）。

初日〈午前〉「餓鬼角力」「花盗人」「炮烙割り」

〈午後〉「とろろ滑り」「座頭の川渡り」「愛宕詣り」

（宝塔縁起奉読）「狐釣り」「腰祈り」「寺大黒」

中日〈午前〉（宝篋印塔供養）（大般若経奉読）（宝塔縁起奉読）

〈午後〉「とろろ滑り」「狐釣り」「腰祈り」「炮烙割り」

（宝塔縁起奉読）「寺大黒」「餓鬼角力」「花盗人」

「座頭の川渡り」「愛宕詣り」

楽日〈午前〉「寺大黒」「座頭の川渡り」「愛宕詣り」

〈午後〉「狐釣り」「花盗人」「腰祈り」（宝塔縁起奉読）

「炮烙割り」「とろろ滑り」「餓鬼角力」

この番組内容からも理解されるように、初日の冒頭と楽日の最後の演目が「餓鬼角力」であるところから、「和久里融通大念佛狂言」の本質は、「施餓鬼会^③」を明確に意図したものであることが判明する。

さらに、「宝篋印塔供養」を含め、「宝塔縁起奉読」が三日間で五回も奉納されている。これは、この地方の代官であった長井雅楽介うたのすけが、出家を果たし、朝阿弥ちようあみ（沙弥朝阿）と号して、延文三年（一三五八）に建立した宝篋印塔（通称市の塔）の信仰に関わるものであった。

すなわち、この「融通大念佛狂言」を大きく捉えると、本質的には「施餓鬼会」の開催を目したものであるが、その中に古くから地元の信仰を集めていた「市の塔」の供養を絡めているものもある。それは、上述したように、初日・中日・楽日の午後に、市の塔に対する「宝塔縁起奉読」が計三回組み込まれ、さらに、中日午前には、「宝篋印塔供養」と「宝塔縁起奉読」が行われ、三日間で五度に亘って、市の塔の供養が成されていることから理解されよう。

III、「狂言番組」の内容

和久里西方寺に伝わる大念佛狂言の番組は九つである。以下、その内

容を簡略に紹介する。

〈番組〉

①「餓鬼角力」

〈登場者〉地蔵菩薩、亡者（餓鬼）二人、閻魔大王、鬼（赤・黒）二匹。豪勢な冠に派手な出で立ちの閻魔大王が鬼二匹を引き連れ、足を踏み鳴らして地獄に見立てた舞台へと入場してくる。一方、亡者たちは、閻魔大王の威風に圧倒されて地蔵菩薩の脇に隠れ、恐怖に慄きながら小さくなって入場して来る。

角力は、勝負以前のもので、鬼たちが四股を踏むだけで亡者はひっくり返ってしまう。そこで、壬生寺の本尊である地蔵菩薩が佛に祈りを捧げると、亡者たちに力が漲り、鬼たちを投げ飛ばしてゆく。ふがいない鬼どもに怒った閻魔は、地蔵菩薩に勝負を挑むが、佛の力には敵わず、打ち負かされてしまう。喜んだ亡者たちは地蔵菩薩と共に意気揚々と引き上げて行く。舞台上に残された閻魔大王は鬼たちに怒りをぶつけながら退場していくという筋である。

この曲目が最初に置かれているのは、先にも述べたように「施餓鬼会」の意味と、本寺の本尊^④である地蔵菩薩の霊験を説くために必要であったと思われる。すなわちこれは、始原の形を残しているものと考えられる。本寺の壬生寺では、冒頭に「炮烙割り」が置かれ、末尾には、「湯立て」「棒振り」などの神事儀礼的な演目が当てられており、壬生寺での現存曲目は宗教色をやや離れ、滑稽な仕草を交えた大衆娯楽芸能の側面が強く、和久里西方寺との相違は一目瞭然である。

〈番組〉

②「花盗人」

〈登場者〉大尽、供、盗人。

大尽在供を連れて花見遊山に出掛けた。花を見ながら供に酒を注がせて、大酒を呑み、寝込んでしまう。大尽に酒を注ぐだけで吞ませてもらえなかった供は、ここぞとばかりに酒の盗み呑みをした挙句、酔っ払って大尽と同じく寝込んでしまう。

そこへ、盗人が現れて大尽の金を盗み取る。大尽是供が自分の懐に手を入れたと勘違いして、寝ている供を叩き起こすが、これは盗人の仕業だと分かり、盗人を捕まえる。そして供に盗人を縛る縄を持つてくるように命じるが、縄が近くにないため、供は窮余の策として、藁を見つけてきてその藁を繕って縄にしようとするが、酒に酔っているのと急かされている両方から、気だけ焦ってなかなか縄を纏えない。しかも、捕らえられている盗人も、縄を作られては敵わないので邪魔をする。ようやくのことで縄は仕上がるが、間抜けな供は、何度も盗人を縛ることに失敗し、挙句の果てには主人の大尽を縛ってしまう。結局、大尽是金を取られた上に、盗人にも逃げられ、供に怒りをぶつけながら退場していくという筋である。

この番組の元になるのは、「花見」の曲で、能狂言にも「花盗人」と同名の曲があるが、内容的に見るとこれは、「真奪」^{しんはいつ}に最も近いものである。千本もんま堂の「花盗人」は、この「真奪」そのものである。和久里のものは、桜花の枝や太刀を奪われるものではなく、懐の金である。また、壬生寺のものは、『天正狂言本』の「なわなひぬす人」や「喱物」^{なまぐさのもの}。「成上り」等に似てはいるが、能狂言の「縄綱」^{なわなづな}とは別のものであることを指摘しておく。

ここに登場してくる大尽是、武士か金満家の町人かよく分からないが、場所は大蔵流「真奪」や、『狂言記』「外編」によると、東山辺らしい。これは今の清水寺周辺のような。壬生寺のものは、あくまで「桜花」が主人公であるが、和久里では、泥棒を捕まえてから縄を纏う、「泥縄」の

面白さを表現したものになっている。また、鼻持ちならぬお大尽に町衆の代表である供が、結果として邪魔をすることに主眼が置かれているのかも知れない。

〈番組〉

③「炮烙割り」

〈登場者〉役人（目代）、鞆鼓売り、炮烙売り。

新市が開かれるため、役人が登場して、「一番乗りをした者は、税金を免除する」という立て札を掲げる。そして、この新市に一番乗りを果たした鞆鼓売りが立て札を見て喜び、市が開かれるまでたつぷりと時間があるため、一眠りする。そこへ、ひょうきんな足取りで炮烙売りが続いて登場し、立て札を見て喜ぶが、脇の鞆鼓売りを見て自分が二番であることに気付き、持ち物をすり替えて、一番乗りの風をして一眠りする。

夜が明けると、二人は一番乗りを争って大喧嘩になる。そこへ現れた役人に裁きを委託する。役人は二人に様々な芸をさせて決着を闘ろうとするが、判然としないため、役人は、最後に自分の持ち物を近くの木にぶつけることを命じる。——困ったのは炮烙売りで、やらねば疑われ、やれば商売道具の炮烙が割れて、事が露見するので、ノラリクラリかわしている、痺れを切らした役人と鞆鼓売りに突き飛ばされ、炮烙を打ち砕かれてしまう。鞆鼓売りは、免税の許可を受けて喜び、炮烙売りは、売り物を無くし、二者は好対照で舞台を去っていくという筋である。

壬生寺では、四月の大念佛会の期間中、九度も演じられるご祝儀物で、厄払いの呪術の一つである。始めの筋は「羅生門」に似ており、かつては芸尽くしで観客を楽しませたことが知られている。今も若干の名残はあるものの、往昔は、逆立ち、横転を含め、舞台狭しと繰り出す曲芸のオンパレードであったというが、時代と共に能芸能の形に近くなり、膨

大な数の炮烙を割ることが重要になっていったといえよう。また、これは「愛宕参り」の「かわらけ投げ」の土器割りに起源を持つと思われる。和久里でも割れた炮烙にご利益があると信じられ、僅か一枚の炮烙を子供達が争って奪いあっている。

〈番組〉

④「とろろ滑り」

〈登場者〉大尽、供（奴）、茶屋の女将。

桜花舞う春たけなわの昼下がりのことである。茶屋の女将が名物のとろろ汁を作っているところへ、供を従えた大尽が花見遊山で茶屋へやってくる。女将を相手に、店の名物のとろろ汁で一杯やるうちに、酒が回り、大尽は女将と共寝をしよう（この共寝は和久里独特のものである）。これを見た供は、ここぞとばかりに寝入った二人を余所に、樽酒の全てを呑み干してしまう。酔いが回った状態で、とろろの入った挿り鉢を舐め始めるが、挿り鉢を持ったまま、ひっくり返ってしまう。

この音に驚いた大尽と女将は目覚めるのだが、床一面に撒き散らされたとろろに足を取られ一同は何度ももんどり打って転ぶ。供は、謝りながら大尽と共に、とろろに足を取られながら退場していくという筋である。

壬生寺では、これを「山端やまはなとろろ」と称し、若狭・近江へ通じる八瀬・大原の街道の基点である山端の「平八茶屋」が舞台となっている。千本ゑんま堂ではこれを、「芋汁」と称している。また、和久里が登場人物三名の省略されたものであるのに対し、壬生寺のものは、下男（とくす）、番戸、さらに衣類を盗ろうとする盗人などが登場し、筋は和久里のものより複雑である。

壬生狂言のものは、かつて「山端」と「とろろ滑り」の二曲があつて、

それが一曲になったのではないかと考えられているが、現時点では不明とせざるを得ない。

〈番組〉

⑤「座頭の川渡り」

〈登場者〉座頭（頭・弟子）二名、悪人。

春になり暖かくなってきたので、野外で酒を呑もうと、座頭の頭（親分）と弟子（子分）が、川辺の野に出向き、そこで酒を呑んでいるところへ悪人がやって来る。美味そうに酒を呑んでいる二人を見るや悪人は、盗み酒を考え付く。

弟子の注ぐ酒を、頭が盃を持って待つのだが、悪人に横取りされるため、いくら待っても、酒が呑めない。何度注いでも同じことの繰り返して、二人が不思議がついていると、今度は二人の頭をぶつけられてしまふ。しかたなく、家に帰ろうとするのだが、途中で川を渡らなければならぬ。弟子が座頭の頭を背負って川を渡ろうとするが、ここでも悪人が邪魔をして、頭に成り済まし、弟子に背負われ向こう岸へ行ってしまう。頭は訳が分からず弟子を探すが、弟子は頭が向こう岸で探していることに気付き、訝りながらも引き返して頭を再び背負おうとするのであるが、悪人がまた、弟子の足元に石を置いて二人の邪魔をする。二人が石に躓きひっくり返るのを見て大笑いする。

弟子はここで始めて悪人に気付き、探し回るが、頭は悪人のいることを知らないため、弟子を叱りつけながら退場していくという筋である。

これは、現在、壬生寺には伝わっていないが、残された資料等から、壬生寺で江戸時代中期頃に廃曲になる以前は、「盲の川渡り」として上演されていたことがわかる。これは、「座頭狂言」のジャンルに分類されているもので、内容的には、「井礎」^{どぶかっちり}と「月見座頭」の酒、「鞠座頭」の三

つの要素を取り入れている。和久里以外でこの番曲が消えていった理由の一つに、差別に繋がることと、逆説法じみて内容がよく分からなくなつたからではないか、などと言われているものであるが、「座頭狂言」では、約束事として、盲人は晴眼者にいたふられることが普通の形であり、倫理観の変化とは考えにくく、むしろ、壬生寺が江戸期に未曾有の流行を見た、「夜討曾我」などの所謂『曾我物語』の「曾我物」等を演目に取り入れていく中で、いま一つ人気のない該曲が外されていったと考えるべきであろう。^⑤

〈番組〉

⑥「愛宕詣り」

〈登場者〉大尽、供、母、娘、女中二人。

和久里の西にある愛宕山には、火の神が祀られていて、火除けの信仰を集めていた。往昔の参道には、数多くの茶屋が競うように並び、中には土器^{かわらけ}投げを楽しむ所もあった。本曲では、煎餅を土器に見立てて投げられる。

話は、愛宕山の神社に詣でた帰り道、茶屋で一休みしている母と娘がいる。そこへ、大尽が供を連れてやってくる。女中からお茶をもらい一服したあと、土器投げを楽しむ。その後、ふと茶店にいる娘に目を留めた。手拭いで顔を隠しているが、美しい身なりからして相当な美人だと勝手に思い込む。

さっそく、供を介して娘を妻に貰いたいと母親に交渉させる。母親を口説くが、欲深い母親は、その条件として、大尽の金、刀、羽織を次々と奪ってゆき、最後は供の着物まで要求する。供は途方に暮れるが、大尽の命とあらば仕方なく着物を母親に差し出す。全てを剥ぎ取った母親は早々と帰ってしまう。供も娘を大尽に渡すと帰ってゆく。

大尺は娘を手に入れ、手拭いで隠された顔を覗き込むのであるが、その醜さに驚いてしまう。美女ではなく、とんでもないお多福だったのだ。大尺は這這の体で逃げ出すが、娘は逃がしてなるものかと大尺を追いかけるという筋である。

該曲は、「大原女」に近いものがあり、壬生寺の「愛宕参り」では、死者供養、とくに非業の死を遂げた名もない庶民の供養として捧げられている。

時として、笑いは神佛の力を増す。お多福も火吹男も祝言の目出度い存在で、土器に見立てた煎餅投げも邪悪な魔を祓う厄除けの呪術であり、神々の神饌となるのである。

〈番組〉

⑦「狐釣り」(通常、和久里以外では「釣り狐」と称されている)

〈登場者〉老(古)狐、狩人頭、狩人二人。

一匹の老狐が、辺りを警戒しながら通り過ぎて行く。そこへ罾を持った狩人の頭と二人の狩人がやつてくる。罾を仕掛けて物陰に隠れ、獲物が掛かるのを待つこと暫し。そこへ老狐は、僧侶に化けて狩人達の前に現れてくる。老狐は術をかけ、狩人達を自由に操り始める。

すなわち、狐のようにピョンピョン跳ねさせたり、糞を食べさせたり、拳句の果てには、馬にさせられ、それに打ち跨った老狐は、御幣を振りながら揚々と退場してゆくという筋である。

現在、壬生寺で該曲は上演されていないが、壬生寺の江戸中期の古記録に留められている六十曲の中に「釣り狐」の曲名が見えるので、往古には上演されていたことが分かる。これは、所謂「雑狂言」とか「集狂言」のジャンルに分類されるもので、それらの省略された形のものである。

壬生寺で「釣り狐」が江戸中期以降に廃曲になったのは、現行曲の「玉藻前」で、獵師と獵師の伯父に化けた古狐のやりとりなど、そのカタリのひとつが「玉藻前」と同じものなので、重複を嫌って、壬生寺では廃曲となり、「玉藻前」の番曲を持たない和久里に「狐釣り」が残ったのだと考えられる^⑤。

また、宗派によつては、狐は神とされていることも忘れてはならない。

〈番組〉

⑧「腰折り」

〈登場者〉老女、供、山伏。

老女が寺参りに行く途次、石に躓いて転び、立ち上がれなくなつてしまう(しかし、石に躓いて倒れるまでは、供がひょうきんな仕事で観客の笑いを誘い、老女は老女で、立ち小便をし、陰部を紙で拭いて、その紙の臭いを嗅いでから紙を右手前方に投げ捨てるなど、リアルな表現で観客を沸かせている)。供は、大慌てで老女を起こそうとするが、起き上がらせることが出来ない。

ちようどそこへ、うまい具合に山伏が通りかかる。供は、山伏に老女の立たなくなつた腰を直して欲しいと懇願する。山伏は早速、数珠を揉みながら祈り始める。すると間もなく老女の腰が少しずつ起き上がってくる。しかし、呪力が強すぎたせいか、老女は立ち上がったものの、後ろへそっくり返つてしまう。驚いた供は、今度は後ろから祈つて腰を真っ直ぐにして欲しいと頼む。

そうして何度も前や後ろに倒れ過ぎるため、供は老女の杖で腰につつかえ棒をする。しかし、そうこうする内にそのつつかえ棒を誤つて、老女の股間に差し込んでしまう。山伏はそのつつかえ棒になっている杖を外すと見せかけて、左右に振り回し、最後には老女を横倒しにしてしま

うという筋である。

先述したように、「座頭の川渡り」と「狐釣り」は、往古に壬生寺で上演されていたが、この「腰祈り」は、壬生寺の古記録にも、嵯峨釈迦堂、千本多んま堂、神泉苑等の曲目にも見えない和久里独自のものとなっている。

該曲は、「山伏狂言」のジャンルに入るもので、「能狂言」の中にもこの曲はあり、よく知られているものの一つであるが、和久里では老翁が老女に変わっていて、「能狂言」にはない、老女の「立ち小便」が加えられており、壬生狂言の「大原女」の母親が「立ち小便」するものとそこは同じである。

〈番組〉

⑨「寺大黒」

〈登場者〉僧侶、大黒(妻)、大尽(旦那)、供。

「大黒」とは、僧侶の妻を俗称したものである。本曲は、妻帯してはいけない僧侶が妻を持ち、子までもうけたため、寺を追い出されるという悲劇の話であるが、何故か笑える。

若い住職が、大黒さんに抱かれた赤子を風車であやしめながら、帰ってくる。そこへ檀家の総代である大尽が供を連れて、寺へ本尊を拝みにやってきた。見つければ大変なことになるので、大黒と赤子を、本尊を安置してある厨子の中へと隠す。しかし、大尽は本尊を拝むため厨子を開けると迫る。開ければ全てが露見してしまうので、やれ、お布施の額が足りないなどと言いくるめて追い返すのであるが、大尽達は、帰路で今日の僧侶は様子がおかしいと気付き、供は大尽の袖を引いて寺へと引き返す。寺に着くなり、供が厨子の扉を開けて、とうとう妻子持ちであることが露見してしまう。住職はひたすら謝るが大尽はそれを許さず、僧侶の着

物を剥ぎ取った上に、背に赤子、唐傘、風車を括りつけて寺を追い出してしまふ。泣き崩れる女房は、供が引つ立て、同じく寺を追い出してしまふという筋である。

壬生寺では、「大黒狩り」として上演されており、他には、「道念」とか「性悪坊主」などとも称されていた。僧侶が下着姿で、傘と赤子と風車を括りつけられて引き立てられる様は悲惨であるが、思わず笑いがこみ上げて来るもので、これはこれで鎮魂の儀式がそこに内包されているのである。本曲は、「寺」という場所空間での滑稽さがこの狂言の救いであり、生命線であろう。

IV、まとめに代えて

和久里の地名は、「和栗」からきたとする説もあるが、和久里の「和」は、「神の子を宿す巫女名に由来」するという興味深い説がある。かつて和久里近辺の遠敷郡遠敷村字舞々谷まじまは、十余戸の住民全てが舞々であった。舞の時に唱える音曲も全て越前幸若の流儀であったというが、意外にもこの事はほとんど知られていない。

このように、和久里は、謎に包まれた部分が多いのである。たとえば、和久里に近い名田庄に安倍晴明の子孫が移り住んで、そこを活動拠点にしていたことや、和久里の隣に位置する多田寺の寺領内に眠る、虎御前や曾我十郎・五郎の墓の存在ともども、解明すべきことは、「和久里融通大念佛狂言」に止まらず、まだまだ山積していると云えるのである。

註

- ① 村上美登志「壬生狂言」追跡——和久里融通大念佛の場合——(『軍記物語の窓』第三集、和泉書院、平成十九年十二月)。

② 前회가、平成二十年(子歲)の四月十一日(金)〔午前十時〜午後四時半〕、十二日(土)〔午前十時〜午後五時五分〕、十三日(日)〔午前十時〜午後五時半〕に奉納されたので、次回は、平成二十六年(午歲)の四月中旬の奉納予定である。

③ 孟蘭盆会では、祖霊・死霊の祭祀が懇ろに行われ、新精霊のために、「施餓鬼会」が行われる。円覚上人(十万上人道・導)御などによって、教学的に成立した大念佛も、時代と共に民俗化していったことが知られる。そして、壬生寺の本尊は、地藏菩薩であるが、この菩薩は、弱者である亡者(餓鬼)を地獄の鬼から救って下さる有り難い菩薩であった。

また、絲綱之路から日本への伝播を説いた近年の論考に、金 秋著の『絲綱之路——楽舞芸術研究——』(新疆人民出版社、平成二十二年九月)の第十章「唐朝楽舞研究」百十七頁〜百四十八頁、同第十六章「日本楽舞芸術研究」二百四十二頁〜二百七十六頁は、参考になる部分が少ないからずあるので、ここに紹介しておく。

④ 壬生寺の「壬生狂言」では、地藏菩薩の力を説くものに、「餓鬼角力」の他、「賽の河原」と「紅葉狩り」がある。「紅葉狩り」は能から来たもので、鬼女に毒酒を吞まされて、刀を奪われた雑茂を救うのが、男山八幡末社の八幡神であるが、壬生寺では、これが地藏菩薩になっている。

⑤ 註(1) 同書論文参照。

⑥ 註(1) 同書論文参照。

⑦ 註(1) 同書論文参照。

⑧ 高崎正秀「阿具利と和久里——巫女命名考——」『高崎正秀著作集』第七卷(桜楓社、昭和四十六年九月)所収論文、「巫女命名由来」章、三百五十一〜二頁参照。

⑨ 柳田國男「山莊太夫考」『定本柳田國男集(新装版)』第七卷(筑摩書房、昭和四十三年十二月)、「物語と語り物」内所収論文、百二十頁参照。『若狭郡県志』(『小浜市史』第一卷「資料総説」)所収、小浜市役所刊、昭和四十六年十一月)参照。

補註

以下、「和久里融通大念佛狂言」の開催準備・舞台設営、大念佛狂言施

行等の実態を覚書の形で、資料と共に左記に掲げておきたい。

① 十二年間で二度、四月に開催される大会準備は、その歳の正月から保存会・区役員等を始めとした関係者が集い、四月までに十数回の会合を持ち、準備される。

② 狂言方・囃し方等の練習は、正月から週三日(一日約三時間)のペースで、四月まで執り行われる。一人で全九曲こなせる人はおらず、三曲こなせる人が数人おられる。殆どの方がサラリーマンで、時間的制約には厳しいものがあるが、他の多くの所と異なり、後継者不足の心配は今のところ無いのが救いである。

③ 舞台設営は一ヶ月程前に合間を見て、区民が作り、舞台が完成すると開催一週間前から本番に備えた本格的予行演習を毎日行う。

※舞台の図案二枚と、直近の平成二十年度奉納時の出演者名(日によって適宜、入れ替わることがある)一枚の計三枚を後ろに掲載しているので参照されたい。

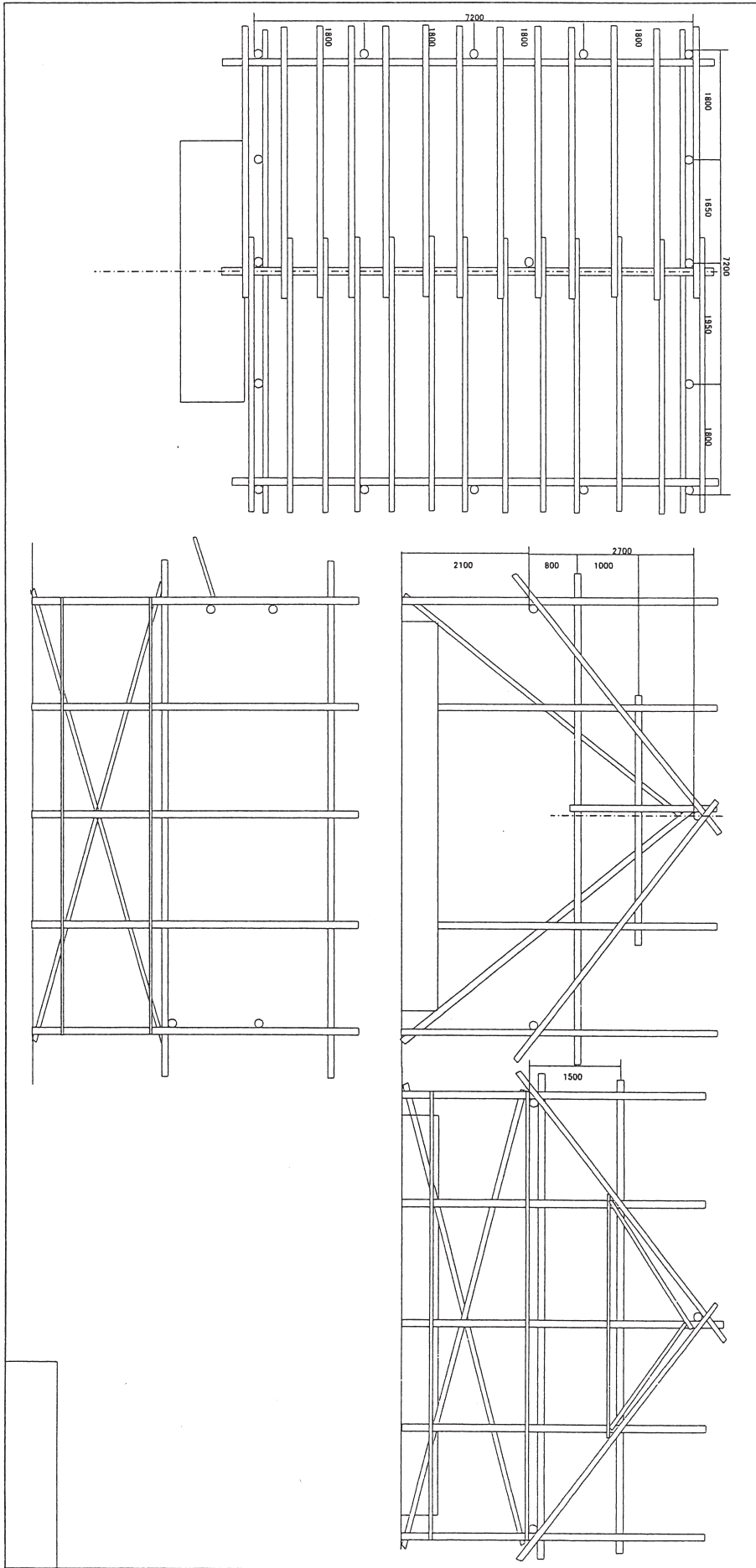
④ 大念佛狂言奉納にかかる総費用は、大雑把にみてもおよそ五百万円ほど必要で、公的補助の他、殆どは旧和久里村九十戸、新町区民五十戸の計百四十戸の寄付を中心を集めている。

⑤ 後片付けは、奉納終了直後は何もせず、翌日から始め、数日で片付け。衣装や面、小道具などの管理は保存会が行い、殆どの物は公会堂に格納してある。

⑥ 反省会は、練習後に毎晩行い、奉納後は行わない。

⑦ 出張講演は、平均すると年に二回ほどあり、可能な限り出演しているが、費用的には持ち出しのことが多い。曲目は時間的制約もあり一曲のみ行う。

⑧ 新会長選出は、年功序列的に行い、一期六年が漠然と決められている。例えば、前回は平成二十年四月に奉納が執り行われたので、平成十六年から会長をしておられる永井龍雄氏は、平成二十二年十月の総会時か、翌年の三月までには会長の任を解かれ後進に道を譲る手筈になっている。二期連続で会長を務めた人は今のところいない。



舞台設計図案②

平成20年4月 和久里壬生狂言配役表

4月11日(金)

4月12日(土)

4月13日(日)

「和久里融通大念佛狂言」の世界

がきずもう 餓鬼角力	えんまだいおう 閻魔大王	やまぐち 山口	ふみひろ 文博
10:00	あかおに 赤鬼	たなか 田中	ひであき 秀明
	くろおに 黒鬼	ひらい 平井	かずお 和雄
	じぞうさま 地藏様	こにし 小西	かずなり 一也
	がき 1 餓鬼一	たなか 田中	よしかず 喜志一
	がき 2 餓鬼二	たなか 田中	けいすけ 圭介
はなぬすつと 花盗人	だいじん 大尽	あかお 赤尾	なおき 直樹
10:30	とも 共	いなもと 岩本	まさき 昌樹
	ぬすつと 盗人	こにし 小西	さとし 諭
ほうらくわ 焙烙割り	もくだい 目代	かわら 河原	かつし 勝視
11:00	かつこうり 鞆鼓売り	やまぐち 山口	ゆきひこ 祐喜彦
	ほうらくわ 焙烙割り	ながい 永井	よしあき 良明
すべ とろろ滑り	だいじん 大尽	つじの 辻野	よしあき 義明
1:30	とも 共	こし 小林	まさなお 正尚
	おかみ 女将	この 越野	のぶゆき 信幸
ざとう かわわたり 座頭の川渡	ざとう 1 座頭一	たなか 田中	かずお 和夫
2:00	ざとう 2 座頭二	かどの 角野	せいいち 誠一
	あくにん 悪人	むらかみ 村上	かずなり 一成
あたごまい 愛宕詣り	だいじん 大尽	うえやま 上山	はるひと 晴人
2:30	とも 共	つじ 辻井	たかゆき 孝之
	はは 母	さわだ 澤田	いさむ 勇
	むすめ 娘	おかみ 岡見	たつや 達也
	じよちゆう 1 女中一	つじ 辻井	まさひと 政士
	じよちゆう 2 女中二	こはら 小原	かずなり 一成
きつねつ 狐釣り	きつね 狐	やまぐち 山口	かずや 和哉
3:30	かりゆうどがしら 狩人頭	えびね 海老根	まさみ 政美
	かりゆうど 1 狩人一	かわはら 河原	いさく 栄作
	かりゆうど 2 狩人二	ふじ 藤井	のぶひろ 信宏
こしいの 腰折り	ろうば 老婆	ふじ 藤井	まさひろ 晶浩
4:00	とも 共	ながい 永井	としみつ 利光
	やまぶし 山伏	よねむら 米村	ゆきまさ 幸真
てらだいこく 寺大黒	そうりよ 僧侶	しばた 柴田	かずと 和人
4:30	だいこく 大黒	つじの 辻野	まさき 雅樹
	だいじん 大尽	つじ 辻井	ゆうじ 裕二
	とも 共	いわた 岩本	ひろゆき 裕之

すべ とろろ滑り	だいじん 大尽	ながい 永井	よしかず 良和
12:45	とも 共	こばやし 小林	まさなお 正尚
	おかみ 女将	この 越野	のぶゆき 信幸
きつねつ 狐釣り	きつね 狐	やまぐち 山口	かずや 和哉
1:15	かりゆうどがしら 狩人頭	えびね 海老根	まさみ 政美
	かりゆうど 1 狩人一	かわはら 河原	いさく 栄作
	かりゆうど 2 狩人二	ふじ 藤井	のぶひろ 信宏
こしいの 腰折り	ろうば 老婆	ふじ 藤井	まさひろ 晶浩
1:45	とも 共	ながい 永井	としみつ 利光
	やまぶし 山伏	よねむら 米村	ゆきまさ 幸真
ほうらくわ 焙烙割り	もくだい 目代	かわら 河原	かつし 勝視
2:10	かつこうり 鞆鼓売り	やまぐち 山口	ゆきひこ 祐喜彦
	ほうらくわ 焙烙割り	ながい 永井	よしあき 良明
てらだいこく 寺大黒	そうりよ 僧侶	ふるた 古田	むねよし 宗吉
3:10	だいこく 大黒	つじの 辻野	まさき 雅樹
	だいじん 大尽	つじ 辻井	ゆうじ 裕二
	とも 共	いわた 岩本	ひろゆき 裕之
がきずもう 餓鬼角力	えんまだいおう 閻魔大王	やまぐち 山口	ふみひろ 文博
3:40	あかおに 赤鬼	たなか 田中	ひであき 秀明
	くろおに 黒鬼	ひらい 平井	かずお 和雄
	じぞうさま 地藏様	こにし 小西	かずなり 一也
	がき 1 餓鬼一	たなか 田中	よしかず 喜志一
	がき 2 餓鬼二	たなか 田中	けいすけ 圭介
はなぬすつと 花盗人	だいじん 大尽	あかお 赤尾	なおき 直樹
4:10	とも 共	いなもと 岩本	まさき 昌樹
	ぬすつと 盗人	こにし 小西	さとし 諭
ざとう かわわたり 座頭の川渡	ざとう 1 座頭一	たなか 田中	かずお 和夫
4:40	ざとう 2 座頭二	かどの 角野	せいいち 誠一
	あくにん 悪人	むらかみ 村上	かずなり 一成
あたごまい 愛宕詣り	だいじん 大尽	うえやま 上山	はるひと 晴人
5:05	とも 共	つじ 辻井	たかゆき 孝之
	はは 母	さわだ 澤田	いさむ 勇
	むすめ 娘	おかみ 岡見	たつや 達也
	じよちゆう 1 女中一	つじ 辻井	まさひと 政士
	じよちゆう 2 女中二	こはら 小原	かずなり 一成

てらだいこく 寺大黒	そうりよ 僧侶	しばた 柴田	かずと 和人
10:00	だいこく 大黒	つじの 辻野	まさき 雅樹
	だいじん 大尽	つじ 辻井	ゆうじ 裕二
	とも 共	いわた 岩本	ひろゆき 裕之
ざとう かわわたり 座頭の川渡	ざとう 1 座頭一	たなか 田中	かずお 和夫
10:30	ざとう 2 座頭二	かどの 角野	せいいち 誠一
	あくにん 悪人	むらかみ 村上	かずなり 一成
あたごまい 愛宕詣り	だいじん 大尽	うえやま 上山	はるひと 晴人
11:00	とも 共	つじ 辻井	たかゆき 孝之
	はは 母	さわだ 澤田	いさむ 勇
	むすめ 娘	おかみ 岡見	たつや 達也
	じよちゆう 1 女中一	つじ 辻井	まさひと 政士
	じよちゆう 2 女中二	こはら 小原	かずなり 一成
きつねつ 狐釣り	きつね 狐	やまぐち 山口	かずや 和哉
1:30	かりゆうどがしら 狩人頭	えびね 海老根	まさみ 政美
	かりゆうど 1 狩人一	かわはら 河原	いさく 栄作
	かりゆうど 2 狩人二	ふじ 藤井	のぶひろ 信宏
はなぬすつと 花盗人	だいじん 大尽	あかお 赤尾	なおき 直樹
2:00	とも 共	いなもと 岩本	まさき 昌樹
	ぬすつと 盗人	こにし 小西	さとし 諭
こしいの 腰折り	ろうば 老婆	ふじ 藤井	まさひろ 晶浩
2:30	とも 共	ながい 永井	としみつ 利光
	やまぶし 山伏	よねむら 米村	ゆきまさ 幸真
ほうらくわ 焙烙割り	もくだい 目代	かわら 河原	かつし 勝視
3:15	かつこうり 鞆鼓売り	やまぐち 山口	ゆきひこ 祐喜彦
	ほうらくわ 焙烙割り	ながい 永井	よしあき 良明
すべ とろろ滑り	だいじん 大尽	ながい 永井	よしかず 良和
4:00	とも 共	こばやし 小林	まさなお 正尚
	おかみ 女将	この 越野	のぶゆき 信幸
がきずもう 餓鬼角力	えんまだいおう 閻魔大王	やまぐち 山口	ふみひろ 文博
4:30	あかおに 赤鬼	たなか 田中	ひであき 秀明
	くろおに 黒鬼	ひらい 平井	かずお 和雄
	じぞうさま 地藏様	こにし 小西	かずなり 一也
	がき 1 餓鬼一	たなか 田中	よしかず 喜志一
	がき 2 餓鬼二	たなか 田中	けいすけ 圭介

【附記】

本論考は、五年間採択された内の、平成二十一年度～二十二年度「科学研究費補助金（基盤研究C）」に拠る研究成果の一部である。

（国立舞鶴高専人文科学科教授）